

第11群 免疫 II (51~55)

51. 絨毛癌細胞における DR 抗原の発現の有無

(旭川医大)

山下 幸紀, 牟礼 一秀, 清水 哲也

目的: 妊娠あるいは絨毛性腫瘍の成立, 維持において, 移植免疫機構が重要な役割を演じているか否かは未だ不明である. この問題を解明する上で, まず解決しなければならない点は, 絨毛細胞に移植抗原が発現されているか否かを知ることである. 我々は既に, 腫瘍を問わず, 少なくとも免疫蛍光抗体法でみる限り, 絨毛細胞には HLA 抗原 (Classic) が発現されていないことを組織および培養細胞で明らかにしてきた. 今回は更に classic HLA と関連して近年注目を集めている DR 抗原に的をしぼり, それが絨毛細胞に発現されているか否かを検討した.

方法: 3種類の絨毛癌細胞株 (BeWo, GCH-2, SCH) を用い, それらと2種類の DR 抗原に対する monoclonal antibody (7B-6, Kop.) とを反応 (1時間, 室温) させて吸収操作を行い, その後遠沈してえられた上清と, ^{125}I で標識した DR 抗原 (B-cell line; EBV-Wa の膜抗原を Brij 58 で分離, 精製して作成) とを反応 (1昼夜, 室温) させ, inhibition test を行つた.

成績: 陽性対照として用いた B-cell line (BT-1) は, 種々の細胞数 (2×10^6 , その1/2, 1/4, 1/8, 1/16) において, それぞれ抗体活性を吸収し, 残余の上清は定型的な inhibition curve (90%~50%まで) を示した. 一方, 3種類の絨毛癌細胞はいずれも, 陰性対照として用いた T-cell line (Molt 4F) とまったく同様に, いずれの細胞数においても抗体活性を吸収せず, 従つて反応後の上清は何らの inhibition も示さなかつた.

独創点: monoclonal antibody を用いて, 絨毛癌細胞に DR 抗原の発現のないことを初めて明らかにした.

質問

(新潟大) 梶野 徹

① 現在, 絨毛癌細胞には HLA の発現はないとする考え方が優性であります, まつたくないのか, あるいは, 何か修飾をうけているため現在の detection では, 観察できないのか, 今後の発展についてお考えをお聞かせ下さい.

質問

(鹿児島市立病院) 波多江正紀

絨毛癌についての DR 抗原の検索でしたが, 正常絨毛細胞についての検索はされましたか.

52. 着床局所における免疫応答に関する研究—母児接点を構成する組織に内在する免疫抑制物質について—

(宮崎医大)

春山 康久, 河野 恭悟, 藤崎 俊一
森 憲正

目的: 妊娠の成立と維持に關与する免疫機構を明らかにするには, 着床局所における母体免疫系の機能の解析が不可欠である. この見地から, 着床周辺期に母児接点を構成する組織に内在し, 免疫担当細胞の機能を修飾する物質について検討した.

材料と方法: ヒト分泌期子宮内膜 (SE), 脱落膜 (D) 及び絨毛組織 (Tr) の粗抽出液 (Ext) を, mitogen 刺激リンパ球の培養系に加え, DNA 生合成を指標とするリンパ球幼若化 (LB) に及ぼす作用を検討し, 更に Sephadex G-200 chromatography, immunoelectrophoresis 及び CNBr-activated Sepharose 4B affinity chromatography を用い, Ext 中の作用物質の分離, 同定について検討を加えた.

成績: ① SE-, D- 及び Tr-Ext の LB に対する作用とその mitogen 特異性: SE-, D- 及び Tr-Ext とともに, B cell mitogen (PWM) にくらべ T cell mitogen (PHA, ConA) 刺激 LB を高度に抑制し, それぞれ 9, 6, 7 mg 湿重量/ml の濃度で 50% suppression を示した.

② Ext のゲル濾過による LB 抑制物質の分離: SE-, D- 及び Tr-Ext とともに, 分子量約16万の分画に PHA 刺激 LB 抑制物質が分離され, この抑制分画による 50% suppression は, SE-, D-, Tr-Ext 分画のそれぞれ 2.5, 0.6 及び 0.5 mg/ml の蛋白濃度において認められた.

③ 抑制物質の同定: 上記の PHA 刺激 LB 抑制分画は, 免疫電気泳動によつて IgG 領域に一致する沈降線を示し, IgG を含むことが明らかとなつた. この分画を抗ヒト IgG ウサギ血清をリガンドとする affinity chromatography で溶出すると, LB 抑制作用は著減ないし消失することを認めた.

以上の成績から, 着床周辺期において母児接点を構成する組織に, 内因性物質が關与する母体 T cell 機能の非特異的な抑制的調節機構の存在が示唆され, その要因の1つとして, IgG の關与が推定された.